

弥陀の誓願不思議にたすけられまいらせて、往生をばとぐるなりと信じて念仏申さんとおもいたつところのおこるとき、すなわち摂取不捨の利益にあずけしめたまうなり。弥陀の本願には、老少善悪のひとをえられず。ただ信心を要とすとするべし。そのゆえは、罪悪深重煩惱熾盛の衆生をたすけんがための願にてまします。しかれば本願を信ぜんには、他の善も要にあらず、念仏にまさるべき善なきゆえに。悪をもおそるべからず、弥陀の本願をさまたぐるほどの悪なきがゆえにと云々。

北第3組 即信寺住職

亀谷 亨

text by Susumu Kamegai

## 第一章 「ただ信心を要とす」

弥陀の本願には老少善悪のひとをえられず。ただ信心を要とすとするべし。そのゆえは、罪悪深重煩惱熾盛の衆生をたすけんがための願にてまします。

この一節には、宗祖の歩まれた仏道が「信心を要とする仏道」であることが述べられています。「要」とは「必要・要求」ということではなく、「要」（カナメ）の意であると言われています。つまり、如来の本願と衆生の信心が別々にあるのではなく、「信心として本願は現行する」（本願力回向の信心）という意味で「要」と言われるのでしょう。そのことを「知るべし」と強調されているということは、本願力回向の了解が不透明になっていた念仏教団の現実が歎異されているのではないかと思います。

信心については、宗祖自ら「真実の信樂實に獲ること難し」と言われ、宗門の歴史においても、「国に一人、郡に一人」と、信心獲得の困難性が伝えられています。現代でも信心獲得に対する憧れは「回心コンプレックス」という言葉も生み出しました。信心が「難信」であることの背景の一つには、「信心を要とす」ということについて「信心が必要である」と、自分に信心を要求してしまうという方向の誤りがあるのでしょう。

私たちが真宗の信心が他力回向の信であることは知っています。しかし「本願力回向の信心」と聞くと、本願の不思議な力によって清らかで不動なる心が自分に注入されるようなイメージを持ってしまいます。そして、信心獲得によって自らを完成できるという予定概念で真宗を学び、信心を追い求めるといふあり方に迷い込んでいきます。それは自我の心をそのままにして、その上に他力の信を積み上げようとするからです、やはり自力の信なのです。その歩みは「ただ信心を要とす」といわれる本意とは正反対のものであり、むしろ、より一層「難信」を助長する強固な壁となるのです。

かつて「自覚の信か、恍惚の信か」という言葉が取り上げられたことがあります、信

心を自分の思いの上に作り上げようとするならば、その歩みがどんなに真剣なものであっても、それは「恍惚の信」でしかありません。恍惚の信によって生死の迷いを離れんとすることは、それ自体が矛盾なのです。

真宗の信心はどこまでも「念仏の信心」です。念仏に開かれるところの信心ですから、念仏の法に教えられ、念仏の法に育てられていく、それ以外に他力の信を得るということはないのです。

和讃に「智慧の念仏うることは 法蔵願力のなせるなり 信心の智慧なかりせば いかでか涅槃のさとらまし」とあります。「智慧の念仏」とは仏の智慧を体とするのが念仏であり、「信心の智慧」とは仏の智慧があらわれたのが信心ということでしょう。智慧の念仏に育てられ発起するがゆえに、その信心もまた仏の智慧を根拠とする自覚の信なのです。ですから、本願力回向ということは、念仏によって私たちに仏の智慧が回向されているということです。

その開かれた自覚の内実が「罪悪深重煩惱熾盛の衆生」なる自身への目覚めなのです。信心が要ということは、言い換えれば「罪悪深重煩惱熾盛の衆生」の自覚が要であるということなのです。しかし、その領きも感情と理知の所産であるならば、やはり「恍惚の信」です。

むしろ「仏法を求めることさえも自分の腹を満たすために利用してきた、そういう求道そのものが救済の道理を見誤り、如来に背いてきた」という意味での「罪悪深重煩惱熾盛」なる自覚こそが信心の要となるのです。

その自分をどこで知ることができるかといえ、それは如来に大悲されている私たちの相を聞くことにおいてのみ知られるのです。本願力回向の信心とはその大悲の呼び声をはじめて聞き得ることのできた「信」なのです。

信心は「聞即信」と言われるように、聞以外に信はありません。ですから、聞いてそれから新たに信を得るのではなく、聞名の念仏に育てられ、聴聞を通して「本願を聞く耳を賜る」、それが真宗の信心の成就なのでしょう。